ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間 (神のマイナンバー制度)

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

※本講演の聖句箇所の多くが新翻訳の校正段階の本文から引用されていますが、いずれも確定した本文ではなく今後変更となる可能性があります。

はじめに

本日は「聖書の行間」つまり、聖書の文言に隠れている部分があるという点を中心にお話したいと思います。行間を読むともいいますが、それは文章に直接表現されていない筆者の真意をくみとることです。これを聖書に当てはめてみたいと思います。当初、この講演の副題を「聖書もマイナンバー時代」としておりましたが、意味が曖昧で誤解を招く表題でもあり、「神のマイナンバー制度」と変更しました。本日は特別に政治的な意味合いは全くないことを冒頭に強調しておきたいと思います。

現在行われている聖書協会の新翻訳事業の特徴は簡略化して言えば、以下のようになるでしょうか。まずそれは当然、全教会が使用するものである聖書をめざしていることです。そのために、典礼で使用できる美しい日本語、かつ現代人の感覚に合ったもの、また日本語と日本の文化に貢献するべく沢山の資料を網羅し、適切な訳語を発見すべく、日々努力しているわけです。

本日は以下の4点の流れで話を進めたいと思います。

1. 聖書には慣れという落とし穴、習慣、固定概念で見落とす、または見ないでいる部分がある
2. 文化を越えて・狭い特殊世界から普遍拡大世界へと向かう聖書の世界
3. 翻訳作業の中で遭遇した事例・新翻訳の一側面
4. 「聖書に書いてない事柄」についてとまとめ

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

1.　「慣れ」という落とし穴がある。聖書には慣習的に読み、当たり前として見落とす、または見ないでいる部分がある。

私が小さいときからお世話になったアイルランド系米国人で宣教師、ルシアン神父という方がいました。戦後すぐ来日、日本語も全く話せない頃に、将来の活動のためにと日本中を視察して回ったそうです。そのような中、東北地方を回った後に続けて東京から長崎まで旅をしました。新幹線のない時代ですから、夜行寝台列車の食堂車で何回も食事をするような長い旅でした。食事の席ではどういうわけか、いつも同じ男性が自分の前に座ったそうです。その男が初対面の食卓で手を合わせ、突然言い放ったことばは「いただきます！」でした。それはルシアン神父にとって全く意味の分からぬことばでした。そこで当惑しながらも自己紹介かも知れないと思い「ルシアンです！」と応えました。その男は英語が全くできず、共通のことばがないために二人はただ黙々と食事をして別れました。次回もその次も、食堂車に行くたびに例の男がいます。会話はただ「いただきます」と「ルシアンです」そして、無言の食事という不思議な時間が過ぎました。

さて、いよいよ長崎に到着直前の最終日、さすがのルシアン神父も何かおかしい、これは食前の祈りかも知れないと察し、今度は自分から先に食堂車に行って男が来るのを待ちました。例によって男が自分の前に座ると、待っていましたとばかりにルシアン神父が「いただきます！」と勢いよく宣言しました。すると、何とその男は「ルシアンです！」と応えたのです。
可笑しくも珍しい話ですが、私たちは似たようことをしています。つまり、それが正しいかどうかを吟味しないままに、何回も繰り返されるとそのまま踏襲してしまう傾向があるようです。

最近地方に多い不思議な交通事故の報道がありました。それは十勝型事故とか田園型事故とも呼ばれるものです。なぜか見通しのよい田舎の田園地帯の交差点で大きな事故が起きるのです。見晴しのよい場所ながら慣れ慣れになってしまい、周囲を見ない、または見えない状況になるのだそうで、これをコリジョーンコース現象とも呼ばれているそうです。私たちには慣れてしまうと極めて感覚が鈍感になり、重要なことも「見えなくなる」とでもいう習性があるのでしょうか。

慣れたために「鈍感になる」のと逆に鋭敏になる場合もあります。これは使徒言行録17章23節に出る、第二回目の宣教旅行に出たパウロがアテネを訪問したときの件です。

> 道を歩きながら、あなたがたが拝んでいるものをよく見ていると、「知られざる神に」という銘が刻まれている祭壇さえあったのです。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを告げ知らせましょう。

旅先で遭遇する新しい場所は不慣れなためか、私たちは周囲に鋭敏になり、いろいろな珍しいものが目に飛び込んで来るものです。使徒パウロにとって旅先アテネの「知られざる神に」という銘がまさにそれでありました。私が日々通勤しているカリタス女子短期大学の最寄り駅、あざみ野駅周辺や、町田市の我が家の周辺は慣れ切っていて何も珍しいものはありません。ですが、ここ会場であるホテル・メルパルク横浜周辺は私にとって初めての場所で、もろもろのことが珍しく感じられ目に飛び込んできます。

私はあるとき、八王子市にある聖パウロ学園というカトリック系の高等学校を訪問しました。学校玄関には大きな垂れ幕が掲げられてあり、関東大会、および全国乗馬大会で優秀な成績を残したことが表示されておりました。この学校は八王子市郊外の簡素で緑に囲まれた所にあり、学校のすぐ裏手には馬場、この高校乗馬クラブはオリンピック出場選手から直接指導を受けるという恵まれた条件にあります。関東地区ではトップ、全国でも常に上位入賞をする凄腕の高校と聞きました。応対に出た進路指導の女性教諭に私はこうもちかけました。「先生、凄いですね。でも、たしか、皆さんが名前を戴いている聖パウロは昔“落馬”したのですよね」。女性教諭は複雑な顔してから「そうでしたね」と応え、二人とも笑いました。

どういうわけか、西欧の美術作品には沢山の「パウロの回心」という絵画や彫刻がありますが、みな「馬から落ちる」パウロが描かれております。矛盾するのですが、関連個所の使徒言行録第9章は以下のとおりです。

> ところが、サウロが進んで行ってダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と語りかける声を聞いた。 そこで彼が、「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。～中略～ そこで、人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。～中略～そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に両手を置いて言った。～中略～ すると、たちまち彼の両目からうろこのようなものが落ち、サウロは再び見えるようになった。そこで、彼は身を起こして洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。(3～8,17～19節)

サウロは「馬から落ち」ではなく「地に倒れた」のであって、ここには「馬」は全く出ません。専門家によると、当時の馬は殆どが軍用で、日常生活ではロバなどの小動物が使用されたと言われています。一番の決め手は盲目になったパウロをなぜ「手を引いて」連れて行く必要があったのかという点です。馬がいれば、馬に乗せて運ぶのが常識でしょうが、全く「馬は不在」なのです。ですが、キリスト教世界では「パウロは落馬」という常識が定着しております。本当に不思議なことです。ちなみに「目からうろこ」という日本の諺の原典もこのパウロの回心記事からです。

私たちは聖書を繰り返し読みますが、その中にはあまり根拠のない慣習をそのまま受け入れ、真実を見落とし、謝った事柄を繰り返しの中で「当たり前」として受け入れていることが多々あるように思われます。慣れ切って盲目になる、固定概念のように受け止め「見ていない」部分がある事実との関連を、今日は聖書の文言に顕れない部分、聖書の「行間」と関連させてお話しを進めます。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

2．文化を越えて・狭い特殊文化から普遍拡大世界へと向かう

子供の頃、私が住んでいた所のすぐ隣に江木という町がありました。朝起きて東の方を見ると、その町が見え、幼い私にとって森の向こうに見える江木町はいつも「世界の果て」でもありました。原始的な感覚とでもいうのでしょうか、あるときの川の向こうや橋の向こう、また山の向こうは別世界、未知の世界、あの世にも通ずる不思議な場所になるのです。私は大人になったら江木町の向こうに行ってみたいという夢を抱いておりました。しかし、大人になってみると私の世界は更に拡大し、江木町の向こう側には更に広い世界が続いておりました。

聖書の世界も小さな古代ユダヤ社会からより広い世界へと拡大してきたことを意識することがあります。即ち、ごく限られたユダヤ人の小さな集団から、やがてキリスト教となり、大きな普遍世界に拡大したという点であります。この点に関して私は、人知を超えた神の不思議なご計画が存在しているというように思っております。

旧約のミシュティン　ブキール（壁に放尿する者）という表現

聖書には奇麗で聖なることだけが並んでいるという印象がありますが、実はそうでもありません。主ご自身もマルコ福音書7章19節で「それは、人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、外に出て行く」と述べる箇所があります。この「外」に関しては新翻訳では注付きで“便所！”と説明されております。余談ですが、数年前、日本映画『テルマエ・ロマエ』が話題になり、それは風呂とトイレに関する興味深い映画でした。中国などからの観光客による爆買が報道を賑わせておりますが、日本のトイレの「乙姫」や「ウォッシュレット」は今や世界中で人気があるのは周知のとおりです。

明治維新までの日本は公衆トイレなどのない素朴社会でした。日本で最初の公衆トイレが誕生したのはここ横浜が最初であったそうです。それは明治4年に当時の政府が外国人の多いこの横浜で国の体面上、道端での放尿を厳しく取り締まり、「放尿取り締の布告」というのを発布したという記録が残っています。

そういう西欧も近世以前までは似たような状況であったようですが、古代のユダヤ社会には当然のことながら公衆トイレは全く存在しませんでした。
ところで、旧約聖書にはヘブライ語で「ミシュティン　ブキール」という珍しい表現があります（1サム 25章22、34節1列 14章10節16章11節、21章21節、2列 9章8など）。その意は「城壁に放尿する者」で、つまり男性を意味しております。1711年発刊のKJVことKing James Versionはここを“any that pisseth against the wall”と直訳しましたが、その後の現代語訳聖書では殆ど総ては直訳せず「男(性）」と言いかえて訳しております。私の話のポイントは旧約聖書がユダヤ人特有の狭い文化の中で生まれたものであり、それが今、世界共通、より開かれた広い文化、広い社会に通用する普遍的な訳として私たちの手に届いているという事実をここから知ることができるということです。

聖書には奇麗で聖なることだけが並んでいるわけではないと申しましたが、預言者エリヤが列王上18章27節で異教の神々を「下ネタ」であざ笑う記事があります。「大声で叫ぶがいい。彼は神なのだから。瞑想（注ではおしゃべり)しているか、それとも用を足している（便所にいる）か、旅にでも出ているのか」とあります。 また、同じく異教の神々に関してエレミヤ章50章２節では「バビロンは陥落し、ベルは辱められた。マルドゥクは砕かれ、その像は辱められ、偶像は砕かれた」とあり、ここでの「像」や「偶像」という語はアツァーブとギルール、つまり、その元の意は排泄物を指すのだそうです。また列王下1章2節のエクロンの神「バアル・ゼブブ」も(排泄物につく)ハエの神ということになっております。

特に興味深いのは申命記23章12～14節で以下のとおりです。

> 陣営の外に一つの場所を設け、用を足すときは、そこに行きなさい。武器のほかに杭を用意し、外でかがむときには、それで穴を掘り、再びそれで排泄物を覆いなさい。あなたの神、主はあなたを救い、敵をあなたに渡すために、陣営の中を歩まれる。陣営は聖なるものである。主があなたの中に何か恥ずべきものを御覧になって、あなたから離れ去ることのないように。

ここで語られる神については排泄物が嫌いだから陣営の中は排泄物が見えないように注意しろと言っていることになります。私自身、自分が抱いているキリスト教の神のイメージとは大きくかけ離れた神、特定の狭い文化圏の中の神という印象を強く受けるのですが、いかがでしょうか。

オランダなど海外で活躍の言語学者、村岡崇光（タカミツ）氏は「翻訳とは文化の違いを超えて意味を伝達する作業の「解釈」で「言語の移行」ではないと述べておりますが、真理を穿ったことばと思われます。
もう一つ、特定社会という点から述べれば、キリスト者とは「洗礼を受けた者」と言うことができますが、ユダヤ教ではそれが「割礼を受けた者」でした。これを前提として読まないと誤解し兼ねない箇所がハバクク書2章15～16節で、以下の文章があります。

> ああ、隣人に強い酒を飲ませ 酔わせたあげく、その裸を見ようとする者よ。あなたは栄光よりも恥にまみれる。あなたも酔いしれ隠しどころを現すがよい。

ここでの「裸」も「隠しどころ」も割礼との関わりで理解すべきで、単なる裸以上のニュアンスがある箇所です。つまり、「裸になる恥」ではなく、割礼を受けていないことが露わにされることを大きな罰として述べているのです。この箇所では昔から幾つかの読替えが行われてきました。それはユダヤ教の「割礼」文化から脱却してもっと広い世界に通用する訳への試みであっと言えるかも知れません。勿論、多くの翻訳者はヘブライ語そのもの「無割礼(隠し所）が露わになる」を踏襲します。

しかし、聖ヒエロニムスによるウルガタ訳では「眠ってしまう」となっております。これは、割礼から脱却してユダヤ以外の文化でも通用する優れた解釈と思われます。しかしながら、言語的根拠は不明で、ヒエロニムスの個人的な解釈であるかも知れません。私自身が更に優れた普遍化された訳と思っているのが、「よろめく」という訳です。これは死海写本やギリシア語写本に見られる解釈で、日本語の口語訳の他、RSV、MFT, NAB, NEB, TEV, NJV, NRSVその他多くのバージョンがこの解釈を採用しています。この解釈には言語的にも根拠があり、ヘブライ語の隠しどころ、ブヘ・アラルをブヘ・ラエルと写本家が**「アとレ」**を逆順に写し間違えたのであって、元々は「よろめく」であったという主張です。しかし、新翻訳は現在のところヘブライ語そのままの訳となっています。

小さい世界から広く普遍的な世界へ・人口の比較

元々小さな部族社会であったユダヤ人の神は汚物にこだわる神でした。またそれは割礼や契約と深く結びついた特殊社会であり、そこからキリスト教の神として世界普遍の神になったとも言えるのでしょう。これを聖書の表記から単純に人口の比較でみるのもわかり易いかと思われます。まずは「３１８人」という数です。これは捕虜となったロトー族を救出すべくアブラハムが仕掛けた「シディムの戦い」と呼ばれるもので、これに参戦した兵士の数です（創14章14節参照）。「あなたの子孫は星のようになる」（創15章5節）と約束されたアブラハムですが、彼を中心とする集団、あくまでも推測ですが、この頃のアブラハム一族の数は500人とか精々1000人程度ではなかったでしょうか。次に出るのは60万を超える大きな数です。それは出エジプトに関する民数記26章51節に出ます。そこには「登録された者、総数は601,730人」とあります。

私がここで強調し注目していただきたいことは、この小さい集団から全世界に広がった聖書の世界ですが、その翻訳活動に関する最近のデータです。聖書を読むキリスト者の人口は2014年統計で何と22億人を超えております。本当に小さい特殊社会から、世界共通の大舞台へと拡大化、普遍化した現実の中に聖書が存在しているわけです。そして、翻訳に求められるのは狭い文化の壁を越えて、普遍化し広く新しい世界に通用する「質」が要求されるというわけです。United Bible Societiesと日本聖書協会によれば、世界にあると言われる6,600～6,900の言語中2,551言語で翻訳が進められ、2012年現在で新旧両聖書では484言語、新約聖書は1,257言語で翻訳が完了と報告されています。更に、新たな約2,000言語で翻訳が現在進行中ということになっております。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは
一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部
〒 104-0061　東京都中央区銀座 4-5-1
TEL.03-3567-1989　FAX.03-3567-4436　E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲

▶ご利用規約　▶プライバシーの保護について　▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved.　当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

3．　翻訳中の遭遇した事例・新翻訳の一側面

ヘブライ語アピックの訳語・川床と涸れ谷

　私の大好きな讃美歌21　131番では「谷川の水を求めて　あえぎさまよう　鹿のように　神よ、私はあなたをしたう」と歌います。これは詩編42編2節「神よ、(ヘブライ語で)アピックに鹿が水をあえぎ求めるように わたしの魂はあなたを慕い求めます」に基づいております。 このアピックが本当に日本語の「谷川」と一致するかどうかです。違うとなれば、ニュアンスは多少とも原典と変わって来るはずです。国語辞典によれば、谷川とは谷間の川、つまり渓流のことで、チョロチョロとでも水が流れていることを前提としております。一方、ヘブライ語の辞書でアピックをみると、アラビア語でいうワディ、英語でRAVINEとも訳され、ユダの乾燥した砂漠地域にある川の底で雨期には強い雨で激流となる場所を意味します。つまり通常は水がなく乾燥、雨期には水が岩を削り全体が谷のようになっている場所を指します。鹿が喘ぎさまようのはチョロチョロ水があるからではなく、「全く」水のないところを喘ぎさまようということになります。

　谷川の代わりに「川床」と訳されることもありました。私も初め、何も疑問を感じていませんでしたが、川床の意味をよく調べてみて大きな不都合があることが判明しました。川床とは河水の流れる地面、川の水底の面、河床(かしよう)とも読みます(広辞苑)。例えば、日本語の文章で「一年の大部分は**川床**が乾燥する」とか、「客車7両は最終的にぬかるんだ**川床**に落下した」などと使います。つまり、日本語の川床は水があって、ジメジメと湿っていても川床なのですが、これは明らかにアピックとは別です。それで、新翻訳ではこれを「涸れ谷」と訳しました。エゼキエル書に多く出る(6章3節、31章12節、32章6節、34章13節、35章8節、36章4、6節の7ケ所)のですが、興味深いのは36章4と6節で以下の4語が出ます。ハール「山」とギブア「丘」に、アピック「涸れ谷」とガユ「谷」、要するに文脈から明白ですが、全部が「水のない」場所なのです。

パンとハン（飯）

エゼキエル書4章16節に「人の子よ、見よ、わたしはエルサレムで（ヘブライ語直訳で）パンの棒を折る」という箇所があります。通常後半部は「パン（食料）の蓄えを絶つ」とか「パン(食料）の供給を断つ」などと訳されています。パンはヘブライ語でレヘム、ギリシア語でアルトスですが、このレヘム、アルトスは今例に挙げたエゼキエル書だけでなく、マタ6章11節、ルカ11章3節の「主の祈り」の「日ごとの糧」からも分かるように、単なる食べ物としてのパンではなく「食糧/糧」を意味しています。

大変興味深いことに日本語の「ご飯」がこれにぴったり対応しています。尚且つ、パンとハン（飯）で音も似ているところは更に面白いと思います。パンも、ハンも、単に食事をすること以上に、生計を立てる、生きる要という深い意味合いがあります。日本語の「めし」は元々「召しあがる」の名詞化で、室町時代では食べ物一般を「めしもの」と言い、これが江戸時代後期に簡略化され「めし」となったのだそうです。「めしの食い上げ」とは「生活をするための糧が取り上げられ、または失う」こと、逆に「食いっぱぐれがない」とは生活や収入が安定し、失業の心配のないなどのことです。「音楽で飯を食う」とは音楽を聞きながら食事をすることではなく、楽器演奏家、声楽家、芸能人、歌手などの生活のことです。

さて、主の祈りの「日ごとの糧」に相当するギリシア語アルトン・エピウシオン後半の形容詞、エピウシオスは聖書でここだけに出る極めて珍しいことばで、その元の意は不明だそうです。エピは前置詞で「上」とか「越える」、またウシオスは「実体、存在物」を指します。ウルガタ訳ではpanem nostrum “supersubstantialem” da nobis hodieとあり、物的な実体を越えた存在、超自然のものなどと解釈できますが、ギリシア語の直訳、造語のようにも思われます。
伝統的に以下5つの可能性が挙げられていますが、真に深みのある重いことばであることが分かります。即ち、

1) 聖体を指し、その関連でいう霊的な糧（ギリシア、ラテン教父など）
2) 日毎のパン、日ごとの糧という解釈（特にヨハネ・クリゾストモス）
3) 明日、将来の糧（聖ヒエロニムス）
4) 超自然の糧、恵み（聖ヒエロニムス）
5) 生存に必要な総てのよきものなどです

ヘブライ語の現代語訳をみると「日ごとの糧」を「レヘム・フッケーヌ」と訳しております。これは「神が人に与えようとしている糧」「神が定められる糧」「神が私たちに食べてほしいと願っている必要な糧」などなどの意があるそうです。換言すれば、「神から受けるべきものとして我々のために定められた糧」とか「神とのかかわりにおいて、神が決めておられる大切なこと、神が望んでおられる、永遠のいのちに至るため必要なメッセージ」などという解説もあります。これは本日の行間のメッセージと関わるもので、再度触れたいと思います。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは
一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部
〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲
▶ご利用規約 ▶プライバシーの保護について ▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間 (神のマイナンバー制度)

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

音を再現する翻訳

プロテスタントで「外典」、カトリックで「第二正典」と呼ばれる書物の中に「スザンナ」という書があり、ダニエル書13章として補遺扱いになっています。ユダヤ教でも正式な聖書ではないのですが、その内容はこのようになります。悪質な二人の長老がヨアキムの妻、スザンナが夫を持つ身であるのを知りつつも、彼女と情を交わすことを狙い失敗、逆に長老がスザンナを訴え、あわやその餌食となる直前に、預言者ダニエルによって危機一髪助け出されるというお話です。ダニエルによる裁判の件、54節以下はこのようになります。

> 二人が一緒にいたのはどんな木の下でしたか。それで彼は、「乳香樹の下だ」と答えた。ダニエルは言った。「まさしくあなたは致命的な偽証をした・・・神の使いが、神の判決を受け取り、あなたを二つに裂く」～中略～ また、「二人が一緒にいたところをあなたが捕らえたのは、どんな木の下でしたか」彼は、「かしわの木の下だ」と答えた。ダニエルは言った。「まさしくあなたも致命的な偽証をした・・・神の使いが剣を持ち、あなたを真っ二つに切り裂こうと待ち構え、討ち滅ぼす」。

この箇所のギリシア語はふたつの木の「名前」と神からの「処罰」を同じ音で表現しています。乳香樹は「スキノン」、その嘘に対する罰、二つに裂くは「スキセイ」、またもう一人の長老のかしわの樹は「プリノン」、これに対する罰、引き裂くは「プリサイ」という次第です。通常、翻訳文で、原典の音まで再現するのは不可能ですが、これを実現した珍しい例がアンコール・バイブルという英訳聖書です。

まず、スキノン、乳香樹をユー(yew)と訳しました。これはマスティックツリーなどといわれる常緑針葉樹で日本ではアララギとも呼ばれます。これに対応する罰「二つに裂く」をヒュー(hew)と訳し、ユー/ヒューの音韻です。また、かしわの樹はクローブ(cloveでevergreen oakとも呼び、日本名ちょうじ、百里香とも呼ぶ)で訳し、対応の罰、「引き裂く」はクリーブ(cleave)で、クローブ/クリーブという実に翻訳の快挙にも思われます。

さて、新翻訳ではナホム2章11節に似たような箇所がありました。即ち、預言者ナホムが神の罰によって敵の攻撃と水害で滅びるニネベの町を表現した箇所ですが、9節以下はこうなります。

> ニネベの町は、水の流れ出す池のようだ。「止まれ、止まれ」と叫んでも 誰も振り返らない。「銀を奪え、金を奪え」 財宝は無尽蔵、またとない宝の山。 破壊と崩壊、そして壊滅。 心は挫け、膝は震え誰の腰もみなわななきどの顔もみな青ざめる。

「破壊と崩壊、そして壊滅」に相当するヘブライ語は「ブカー、ウメブカー、ウメブラカー」で、「ブクブク」という水音を意図的にとり入れた言葉が3つ並べてあると言われます。新翻訳では当初「空虚、虚無、廃墟」とブクブクの代わりに「キョ」3回でしたが、議論の結果、最終的には「破壊と崩壊、そして壊滅」と「カイ」を3回繰り返す訳となりました。ちなみに、英語でも同じような試みがされていて、3回のR（Raid and ravage and ruin・JB)や3回のDE+TION（Desolation, devastation and destruction・NJV)他にdesolate, dreary, drained・MFTや、destroyed, deserted, desolateなど似たような訳があります。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは
一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部
〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲
▶ご利用規約 ▶プライバシーの保護について ▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間 (神のマイナンバー制度)

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

エゼキエル書7章17節、21章12節・「膝みな　行く　水」

先に引用したナホム書2章すぐ後の11節は「心は挫け、膝は震え、誰の腰もみなわななき、どの顔もみな青ざめる」という流れでした。ニネベ住人の恐怖の反応で、ここでの心は勇気の根源で、その心が挫けるとは戦闘が不可能になることを意味していますし、「誰の腰もみなわななき」の「腰」も力の源であるとされています。

古代の戦闘で重要であったのは内面の力で、戦闘はまさに心理戦であったとも言われます。敗戦を意味する怖気づいてしまう内面の表現は典型的な手や脚、膝の様で表されます。例えば、イザヤ書13章7節「それですべての手は萎え、すべての人の心は挫けまどう」や、ダニエル書15章6節「彼の顔は青ざめ、怯えてその脚は弱くなり、膝はわななく」、更にエレミヤ書6章24節「私たちはそのうわさを聞き、手が萎えた」などです。

さて、エゼキエル書7章17節のヘブライ語を直訳すると「手はすべて垂れ下がり、膝みな　行く　水」となり、特にその後半は何か言葉を補わないでは理解するのが難解です。多くの訳はここを「すべての膝は水のようになる」としました。明らかに文脈はナホムと同じで、戦う意思や勇気がなくなり、呻くだけで大声を出すことも戦闘に出ることもできず、脚(膝)は敵に対する恐怖で震えるという状況です。このような状況で「膝みな　行く　水」となれば、明らかにこれは失禁を意味していると思われます。私はどういうわけか、翻訳作業中、死刑囚、浅原彰晃こと松本智津夫が逮捕された瞬間に強い恐怖のためか失禁したという報道を思い出しておりました。

「水のようになる」という訳は外国語でも大多数の翻訳家が採択する訳ですが、これには実は根本的な問題があります。なぜなら、ヘブライ語には日本語の“ようになる”の“よう”に相当する前置詞「ラ」や「ク」がなく、また動詞も「なる」であったら「ハヤ」があるはずですが、ここでは「ハラク(行く)」なのです。つまり、「水のようになる」は意訳に近いものになります。古代訳、ウルガタ訳もfluent aquisで、直訳すれば「水になって(によって)流れる」です。ギリシア語訳は更に強烈な表現で「水(分)で塗る/汚される」で、失禁そのものです。あくまでも推測ですが、多くの訳はその意味(失禁)が分かった上で「水のように

（弱く）なる）」としたのは妥協の訳、または不謹慎を意図的に避けた工夫の訳かとも思われます。新翻訳ではヘブライ語に忠実、かつ多少の婉曲表現で「水が垂れる」となりました。

金銀銅・金と銀の問題

2020年は東京オリンピック・パラリンピックの年と決定され、私たちも今から心はずむものがあり、いろいろのことが期待されています。オリンピックとなれば、その栄誉のメダルはどうしても金銀銅ですが、聖書ではこれが銀金銅なのです！

ヨシュア記の6章19節は新翻訳では「すべての金と銀、そして青銅と鉄の器は、主に献げる聖なるものである」と金・銀・銅そして鉄の順の訳（口語訳、文語訳も同じ）で訳されていますが、元のヘブライ語順では、これが銀・金・銅、そして鉄の順なのです。金と銀だけに限っても、エゼキエル7章19節は「彼らは自分の銀を通りに投げ棄て 彼らの金は、汚れたものとなる」とヘブライ語順もそのままで、まず銀、そして金です。一般的に私たちの感覚ではまず「金」そして「銀」であるのに対して、聖書では殆どが「銀」そして「金」（創世記13章2；24章35,53節、出エジプト記3章22節、12章35節などなど）の順です。しかし、聖書が「金・銀」の順で語る場合もあります。即ち、エゼキエル書16章13、17節と28章4節、そしてエズラ書1章9、10、11節の6ケ所ですが、むしろ例外的と言えるでしょう。聖書ではなぜ、金よりも銀が先なのかははっきりしません。当時は金よりも銀の方が珍重されていたといえばそれまでですが、貨幣経済が未発達とはいえ、銀の方が実用的で価値が上であったのか、詳細不明という他ありません。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは
一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部
〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲
▶ご利用規約 ▶プライバシーの保護について ▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

4.　「聖書に書いてない事柄」・まとめ

さて、いよいよ本日のお話も佳境に入ることになりますが、ここで聖書のことばには表わされていない、書いてない事柄についてお話したいと思います。これが本日のメインテーマである「行間」と関連しております。ここでお話する内容は次のようになります。

1. パンが増える奇跡でパンはどのように増えたのか
2. 最後の晩餐でのイエスや弟子たちの椅子や食卓はどうであったのか
3. 私たちが聖書を読むとき、神が私たちに伝えるメッセージの3点です

1）パンが増える奇跡で、パンはどのように増えたのか

パンを増やす奇跡は聖書の中の代表的な奇跡です。即ち、五つのパンと魚二匹が五千人の食事として増える奇跡、これはマタイ14章13～21節、マルコ6章32～44節、ルカ9章10～17節、ヨハネ6章1～15節に出ます。そして、七つのパンと小魚が四千人の人に食べられる奇跡はマタイ15章32～39節、マルコ8章1～10節と全四福音書にわたり出るという珍しい奇跡です。

マタイ14章19～20節はこうなります。

> イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天に目を上げて祝福し、そしてそれらのパンを裂いて弟子たちに、さらに弟子たちは群衆たちに与えた。 すると皆が食べた。そして満腹した。

ギリシア語で、本箇所に出る動詞はただ3つ、εὐλόγησεν 、κλάσας、ἔδωκεν、ウルガタ訳でもbenedixit、fregit、 dedit、つまり、祝福した、裂いた、(そしてパンを弟子に)与えた(そして弟子は群衆に)で、「祝福した」を除けば主要動詞は「裂いた」と「与えた」の2つだけです。具体的にパンがどのように増えたのかは全く聖書には書いてありません。その結果、諸々の解釈が存在していま

す。史実とは全くかけ離れたお話であるとか、これは単なる比ゆで奇跡ではないとか、またパンとはイエス自身だとか、パンが増えたのでなく、ただ群衆が「満足しただけ」（満たされたと感じた）などなど解釈さまざまです。四福音書全体に残された重要なこの奇跡が単に「気分」の問題とか、単なる比ゆとして片づけるわけにはいかないでしょう。繰り返しですが、肝心の「どのように分けたか」「いかにいつ増えたのか」は聖書のことばには全く隠されています。

私が大学生のとき、それは東京オリンピックの直後でしたが、パゾリーニ監督によるイタリア映画、『マタイによる福音』という映画を見ました。極めて印象に残ったのが、このパンを増やす奇跡のシーンです。パゾリーニ監督の解釈をあえて命名すれば「瞬間増殖説」となるでしょう。5千人分のパンと魚が小山のように無から有に瞬間的に増えるのです。今考えると滑稽ですが、その時は音楽効果もあり映画の中で大いに感動したことを覚えています。

聖書には書いてないのですから、推測の域を出ないのですが、私自身の解釈はこうです。即ち、「信仰の中で少しずつ増えた」ということになるかと思います。その根拠はまず、旧約聖書にあります。

私の解釈を支持する話は旧約聖書に多数あると思います。例えば、紀元前9世紀、列王記上に出る（メシア、イエスの先駆者）エリアによる似たような奇跡です。エリアは残り少ない粉と油を寡婦に与えるのですが、列王記上17章14節は以下のとおりです。

> やもめは行って、エリアの言葉どおりにした。それで彼女もエリアも、彼女の家の者も幾日も食べることができた。主がエリアを介して告げられた言葉どおり、壺の小麦粉は尽きず、瓶のオリーブ油がなくなることもなかった。

つまり、瞬間増殖ではなく、信じて日々暮して行く中で起きた徐々なる奇跡でありました。弟子エリシャも同じように、寡婦に尽きない油を与えますし(列王記下４章3節)、また人々に尽きないパンも同じように与えています(列王記下４章42節)が、すべて瞬間の増殖ではありません。

旧約時代ではなく、近代現代にも二つの証言があります。50年ほど遡りますが、イタリアのフィレンツェに女性神秘家マリア・ワルトルタ（1897～1961）という女性がおりました。その生涯の殆どをベッドの上で過ごした人ですが、聖書物語に関する幻を受け、数百枚のノートを残しております。その中に、パンの奇跡に関する記述があります。そこには聖書には出てこない子供の存在が大きな意味を持って書かれています。つまり、弟子たち大人はパンの量が大勢の人には不十分という意識で、主のおことばにもかかわらず信じられず動けないでいる中、子供は信じて率先して配り始めるのです。子供の信じきった行動を見て、勇気を得た弟子たちもこれに続いてパンを配り続けます。信じて行動している内に、結果として気がついたら「奇跡」であったという書き方なのです。この方が瞬間増殖よりずっと自然に思われます。つまり、奇跡は魔法使いのような瞬間の出来事でなく、信じて動く中での徐々なる変化ということになります。

私の職場であるカリタス女子短期大学の創立者はカナダ、ケベック州のマルグリット・デュービル（1701～1771）という聖人ですが、その伝記の中にも似た話があります。誰も入っていないはずの倉庫にあった粉がマルグリット・デュービルの「もう一度見て来てください」という言葉で人が行ってみると、増えていたということが繰り返された話です。この場合も一度に粉が増えたのではなく、少しあったものを信じて何回も使用している間に、結果として驚くほどの量の粉を受けたという奇跡なのです。つまり、聖書のパンの奇跡も「（信仰の中）少しずつ、気がつかない間に」ということであったと思います。

余談ですが、私の家では「ローマ時代」というと二千年前のことでなく、私がローマに留学していた1980年から1983年を指します。そのわが家の常用句「お父さんのローマ時代」に、私はマキシミリアム・コルベ神父の列聖式に与るという栄誉を得ました。そこにはアウシュビッツでコルベ神父の身代わりによって解放、危うく断食刑で命を落とすところを生きのびたポーランド人男性も列席しておりました。ある方のことばがあります。コルベ神父が自ら名乗り出てこのポーランド人男性の「身代わりになって死んだ」のは決して人生一回の突発的な一大決断によるものではありません。つまり、その瞬間の出来事だけでなく、愛の実践を日々実行していた延長線上にある、信じて動く「愛の実行」そのものであったというものです。まさにその通り、突発、瞬間の出来事ではなかったのでしょう。わたしたちも一瞬間の奇跡で救われるというよりは、生きて来たそのとおり、生き様そのままの延長線上での最期を迎えるのではと思っています。

■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲

▶ご利用規約 ▶プライバシーの保護について ▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

2）最後の晩餐の食事はどんなであったのか

次に、最後の晩餐に目を向けてみます。その記事はマタイ26章20～30節、マルコ14章17～26節、ヨハネ13章21～30節、一コリ11章23～25節などに出ますが、マタイ26章20節は「さて夕方になると彼は12人と一緒に食事の席に着いた(ギリシア語動詞はアナケイマイ)」とあります。ここでも、聖書そのものには13人がどのような席とテーブルでいかに食事をしていたのか全く情報がありません。私たちが想像する最後の晩餐の構図はダ・ヴィンチの絵画の影響が大きいのでしょうが、前面には誰も座らずに空席という不思議な会食になってはいないでしょうか。これが虚構であることが同じ食卓の記事、罪の女がイエスとファリサイ人の食事をしている席にやって来た件、ルカによる福音7章38節「そして、イエスの背後に立ち、イエスの足もとで泣きながら、その涙でイエスの足をぬらし始めた」から分かるのです。

ポイントは一つ前の36節にも出る動詞、「食卓に着く」(カタクリノマイ、カタケイマイ)という動詞と特別、注目すべきは「イエスの背後」と「足もと」という矛盾です。つまり、通常私たちは矛盾なしで読みますが、実は「足元」は前方であり、「背後」ではないので、ダ・ヴィンチと現代の感覚の椅子、食卓では実に大きな矛盾があるのです。

聖書時代の食事がどのようであったか詳細はここでは述べられませんが、聖書に出る用語を列挙してみましょう。デイプノンが夕食・午後の食事、アリストンは朝食・日中の食事(現代ギリシア語ではプロイノというそうです)、アルキトリクリノスは祝いの席の会場の責任者を指します。またアノテロスは上席、会食で栄誉の席、さらにプロトクリシアになると最上位置の席を指します。

問題は「動詞」です。アナケイマイ(アナクリノマイ)は「横になる」意で、カタケイマイとなると食卓よりも、主に病床で「横になる」意味になるようです。シュンアナケイマイは「ともに横になる」、またアナピプトも同じ意で、その他ケイマイ、クリノ、カタクリノなどすべて根本が「横に伏す」ことなのです。つまり、これが当時の食事スタイルということになります。それであるならば、(食卓で)横になっている状態では「足もと」も「背後」となり矛盾はありません。しかしながら、横になった最後の晩餐をイメージするのはなかなか難しいものがあります。

あるラビの教えによると、食卓で横になる際は背中や右側を下にしてはならず、必ず左側を下にし、食べ物は右手で食べ、また給仕は客人の足の後ろ側に控えるとの教えがあるそうです。1961年製作のハリウッド映画「ベンハー」は時代考証に優れこの食事法が忠実に再現してありましたが、ご記憶にある方もおられるかと思います。

ルカ7章38新共同訳と新翻訳の微妙な相違

この箇所に関しては新共同訳と新翻訳には実は微妙な違いがあります。新共同訳では「後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし」となっていて、つまり、先ほどの前後、背後の矛盾を避けるために「後ろから」と「その足もとに寄り」とで「後から」前の足もとまで移動したという訳なのです。矛盾は解決しますが、この訳の難点は原語から外れ、ギリシア語には「から」や「近寄り」という動詞は存在せず、「近寄り」でなく「立った」(スターサ)なので、多分に「意訳」に近い訳になってしまう点です。

一方、新翻訳は「イエスの背後に立ち、イエスの足もとで泣きながら、その涙でイエスの足をぬらし」で矛盾は解消しないままですが、ギリシア語に極めて忠実な訳となっています。

このように、聖書には「書いてない」部分があり、ある場合はその大まかな表現のために詳細は不明のままです。私たちはこの不明な部分をダ・ヴィンチなどで代表される芸術家が与える情報などで補って読んでいるとも言えるのです。この新共同訳と新翻訳、二つの訳の背景には翻訳に関する難解な問題が潜んでいるといえます。つまり、意味内容が充分伝達されるためにはことばを補う必要がありますが、それが行き過ぎれば「意訳で不可」ということになります。聖書学者大野恵正氏は人口に膾炙される名訳は「意訳に近い」という発言をされていますが、どこまでが「意訳ではない」許容範囲の名訳なのかという判断となると極めて微妙で難解な問題になるでしょう。この箇所の新翻訳は、矛盾がそのまま残る訳となりましたが、ある意味矛盾のまま、闇に包まれた不思議な空白とでも言える余白部分が実に聖書の冥利かも知れません。つまり、聖書は簡潔な文言にも深い意味が濃く凝縮され、解釈者の想定や文化の期待による解釈によってみことばの真実の意味が初めて成立するとも言えます。この点を更にお話しましょう。

前のページへ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 次のページへ

■このページに関するお問合せは
一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部
〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

ページの先頭に戻る ▲
▶ご利用規約 ▶プライバシーの保護について ▶このサイトに関するお問い合わせ

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

おすすめコンテンツ
- 総主事室より
- JBSニュース
- オススメ聖書特集
- JBSイベントカレンダー
- アンケートのお願い
- メールマガジン登録
- 各種資料請求
- 求人情報
- リンク集

お探しの聖書はこちらから
- 聖書協会共同訳
- 新共同訳
- 新約聖書
- 口語訳
- 文語訳
- 講壇用聖書
- 聖書ソフトウェア
- その他(アートバイブル他)
- 録音聖書
- 外国語聖書

聖書事業懇談会

文化を超えて聖書の行間（神のマイナンバー制度）

浦野　洋司氏
2016年3月11日
於:メルパルク横浜

3）聖書に書いてない最重要事、神からのメッセージ！

さて、行間、神のマイナンバーについて考えることにしましょう。聖なる聖書のことばには不思議な3つの次元があるとも言われます。即ち、

1）語句のそのものの意味。ヘブライ語やギリシア語など言語学の次元
2）聖書作家の意図したもの、人間である著者が伝えたかったメッセージ。特定文化から世界に開かれた普遍的な広い世界との格差、文学類型研究や歴史を踏まえた翻訳の意義が問われる次元
3）最後に、私たちが聖書のことばにふれるとき、神がそのときの私たちに伝えたいメッセージの次元(翻訳を踏まえ翻訳を超えた次元)

聖書の伝えるメッセージは新聞の情報やテレビなど現代メディアの情報と大きく違うところは、映像、音、動画などがなく、純全たることばだけによる伝達ということです。この世に生きる人間でありながら、ある意味この世を超える人間がこの聖書を読むのですが、恋人の名前やことばは単なる「文字以上の次元」があります。聖書も似ていて、ことばを越えた次元のことを本日最後に「行間」としてお話しております。その意味で神のことばは尽きることがないのです。書いてない内容はことばの奥にあります。真実の教えは隠れていて、神は聖書のことばを通じて、「そのとき」つまり、私たちが聖書のことばに触れるとき、そのとき伝えたいメッセージを私たちに伝えるのです。昔からこの「行間」を見せて下さるのは神の霊の働きといわれます。

「主の祈り」関連して「日ごとの糧」に相当するヘブライ語、レヘム・フケーヌについて先に触れました。その意味は「神が人に与えようとしている、神が定められた、神が私たちに食べてほしいと願っている必要な糧」ということでした。私たちは聖書のことばを通してこの意味で「日ごとの糧」を得る必要があるのです。

アビラの聖テレジア(1515～1582)はスペイン人で、カトリック教会の有名な神秘家ですが、その著書『完徳の道』の中で「天におられる私たちの父」のたった「父」ということばだけで長い時間の瞑想、観想

の世界に入ったことが述べてあるそうです。つまり、聖書のことばを通して、そのことばを越えて話かけて下さる相手は私たちの父であり神であるという事実が強調されます。

以上を更に整理すると、聖書のことばはまず「コンデンスト」、凝縮されたことばであるということになります。つまり、文字の間に「文化を超えたメッセージ」があり、凝縮されたことばの書いてない部分をほぐす、解釈して奥を読んで初めて真の意味に到達するとも言えます。そして、私たちはこれを日本の文化の中、生きている自分の環境の中で読むのです。

次に聖書のことばは「コンティンジェント」です。コンティンジェントとは、パンを増やす奇跡と比ゆ的に合致しますが、文字面だけの固定した概念、固まった常識だけでは済まないということです。何々次第で、何々を条件として、ひょっとして起こるかも知れない、あるいは可能かも知れない、偶発的・・・そのような条件付きのことばということです。換言すれば、凝縮された文字が解かれていくのは「私たちの信仰次第」であって、受け取る側次第で内容が出て来るかも知れない、つまり、パンが増えるように聖書のことばも増えかも知れない。しかし、また信じなければ、増えないでそのまま残る、そのようなことばであるということになります。

最後に聖書のことばは「マイナンバー制度」のようです。更に換言すればそれは「オーダーメイド」であると言ってもよいでしょう。神は決して「十把一絡げ」の扱いをされないということです。最近、政府のマイナンバー制度では同じ番号が別々の人に届けられたなどという事故報告もされていますが、神のマイナンバー制度はそのようなことは決してありません。雑々を区別なしにひとまとめにして扱うような政府のマイナンバー制度と全く異なる神のマイナンバー制度です。同じ家族、同じ教会のメンバー、同じ職場でも一人ひとり特別のメッセージが準備されています。神は私たちキリスト者一人ひとり、その状況、経歴、そのさまざまな背景に合わせたアプローチをして下さいます。

「翻訳は祈りなしではできない」。これは私の元上司、新共同訳時代に重要な働きをされ、昨年正月に他界されたベルナルディーノ・シュナイダイー神父のことばです。私はこのような懇談会で先に講演をされた諸先生たちがその講演の最後に「祈り」に触れておられたということを発見しました。私はさすがだなあという印象を強く持ちました。つまり、単なる一翻訳者である以前に、一人の信仰者としてこの事業に携わっているのです。

私自身もこの講演の準備として神に祈りました。同僚にも祈りを依頼しました。亡くなった母や、お話しましたルシアン神父にも祈りました。是非、今日ここにお集まりになった皆さまも私たち翻訳者のためにお祈りください。この新翻訳事業が成功するために、特別、将来この新しい聖書を読むすべての人のためにお祈りください。そしてみなさん一人ひとりもこの聖書を通して行間に隠れている聖書の真意、一人ひとりに与えられている神のメッセージを読み取ることができますようにお祈りください。

イザヤ書45章15節には有名な「イスラエルの神、救い主よ。 まことに、あなたはご自分を隠される神」という件があります。ここでイザヤ書の深い釈義はできませんが、本日の話の流れの中で、神様は聖書の行間に隠れていると言ってもよいのではないでしょうか。終わりにユダヤ教ハシディム派のラビ、シュノイエル・ツァルマンが息子に語ったと伝えられるすばらしい「かくれんぼ」の比ゆ、伝承秘話で本日の講演を閉じたいと思います。

> 鬼ごっこをしていた子どもが泣きながら家に戻って来た。「お父さん、かくれんぼをしていて、とてもいい場所を見つけたんだ。とても良い隠れ場だったので、誰も僕を見つけられなかった。でも、そのうちに皆は僕には黙って遊びを終わりにし、家に帰ってしまった。僕は一人取り残されて、何時間も待っていたんだ」。 泣いている子どもに父親が優しく諭しました。「息子よ、神さまも同じだよ。神さまも上手に隠れている。人々が見つけてくれるのを待っている。誰も一緒に遊ぼうとしないから、いつも一人で取り残されている。一人残されて、誰も見つけてくれないから、だから神さまも泣いている！」

ご清聴ありがとうございました。